

## 「愛される祈り」

ダニエル書 9 : 20 - 27

September.20.2020

### ダニエル 9 : 20 - 27 (パワポ)

#### Preface

先週までダニエル書 9 章を 4 回に渡って見て参りましたが、ダニエルが、神の言葉であるエレミヤ書から悟らされたことが、いくつかありました。

まず、彼らイスラエル民族が滅びたのは、バビロンを始めとする屈強な新興勢力に立ち向かうだけの財力や軍勢力などの国力が足りなかったからでもなく、新しい時代について行くための柔軟性が無かったからでもなく、少子高齢化でこれから出てくるだろう若い人材が足りなかったからでもなく、自らの身分を忘れたためだということです。

彼らの滅びは、人間の目から見れば、様々な外見的な力の無さに起因しているように見えてましたが、その実際は、もっと内面的なものであり、根本的なものであり、霊的なことでありました。

始めは、彼らも納得がいきませんし、やはり、国力が足りなかったんだと外見的な要因ばかりに目を向けましたが、70年間の捕囚生活を通して、土台が成っていなかったんだと根本的な要因に気付かされていきます。

つまり、神の民らしい生き方が出来なかった、いや、神の民らしい生き方よりも、世の民らしい生き方を追求した結果、招いた滅びであったということを悟りました。

どの民族も種族も国も経験したことの無い栄光の神の選びによる信仰共同体という国家であることの価値を軽んじ、

また、その信仰共同体である国家を他のどの国とも全く違う次元で繁栄させ、その繁栄のために与えられた神の言葉とその命令を疎かにしたこと。

そして結果的に、神に逆らう歩みをしてしまったために招いた滅びであったことを悟りました。

と同時に、この滅びは、滅びが目的ではなく、回復と癒しと新しいことを行うための地ならしであることも悟りました。

さらには、その地ならしのために定められた70年間という期間がいよいよ終わり、恵みのうちにイスラエル民族と故郷エルサレムに復興がもたらされるということも悟られました。

また何よりも、これらのことを悟ったダニエルは、この滅びという罪の結果を、人のせいにはせず、我が事として真剣に祈りました。

そして、そんなダニエルに、先ほど読んだ聖書箇所にありましたように、主なる神様は、天使ガブリエルを遣わし、すばやい祈りの応答を与えてくださいます。

## Part One

ここで一つ注目したいのは、その祈りに対する神の応答の早さなんです。

### ダニエル9：20-21 (パワポ)

私たちは日々、様々なことを祈ります。

健康を守ってください。試験に合格させてください。道を開いてください。お金ください。コロナを一刻も早く取り除けてください。

このすべての祈りは、目で見て、耳で聴いて、手で触れて体感出来る物事の表面に露わになってくる問題に対する祈りです。

私たちの祈りの多くは、暮らしていく中で生じる物事の解決や改善のための祈りだと思います。

聖書の中にも、食べ物をください、病を癒してください、敵を追い払ってください、目の前に迫っている恐れを取り払ってくださいなどの問題の解決や改善のための祈りがたくさん出てきますし、神様がそれらの祈りに真摯に答えてくださる場面もたくさん記録されています。

ただ、それらの記録を見てみますと、食べ物をくださいと言っている間に食べ物が降ってくるとか、病を癒してくださいと言っている最中に病が癒されたというように、祈りが終わってもいないのに、応答があるようなことはありません。

それらの祈りと応答の間には、必ず、タイムラグ・時差があります。

でも、今読みましたダニエルの祈りには、祈りと応答の間にタイムラグがありません。

### ダニエル9：20-21 (パワポ)

主の前に伏して願いをささげていたとき、すなわち、私がまだ祈りの中で語っていたとき、私が初めに幻の中で見たあの人ガブリエルが、すばやく飛んできて私に近づいた。

さらには、23節で、天使ガブリエルがこう言います。

### ダニエル9：23（パワポ）

あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが出されたので、私はそれを伝えに来た。

ダニエルが、溢れ出てくる思いの丈を主なる神様に祈り始めたその瞬間に、もうすでに応答を伝えるために、ガブリエルが遣わされて、終わってもいない祈りの応答を伝えに来てくれました。

こんな早い祈りの応答を経験したことがありますか？

祈りが終わってもいないのに、待ってましたとばかりに、神様が即座に答えてくださったとは、一体全体、ダニエルがどんな祈りをささげていたのでしょうか？

### ダニエル9：20（パワポ）

ダニエルは、自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白する祈りを献げていました。

私たち人は、自らに、期待していなかったことや望んでいなかった痛みや困難が起こった時、湧き上がってくる思いがあります。

なぜ今なんだ？　なんでこんなことが？　なんで私に？　なんでここで？　神様、あなたは何をしてくれちゃってるんですか？　と、その痛みや困難の要因を私という人に見出すのではなく、外に見出そうとします。

周りの人だったり、自分が属している組織だったり、社会に蔓延している思想や世界観だったり、**“自分は正しいんだ”**ということがまず念頭に出てきます。

そして、自分が正しいんだと正当化したい思いに満ちて、痛みの原因と困難の要因を自分以外のところで見出そうと努めます。

また、その痛みや困難の要因を自分以外のところに見つけようとするすると、そこに暴力的傾向が現れてきます。

特に、自分よりも肉体的に、社会的に、経済的に、序列的に弱い立場にある人たちに、その暴力性が向いていきます。

やっかいなのは、暴力には、動的暴力のみならず、一見すると暴力に見えない静かな暴力があり、またその暴力を振るっている側からすると、間違いを正すための正しい行いであって、暴力だと認識しづらいということです。

親子関係や、夫婦関係、上司と部下、先輩と後輩、友人同士、国家間や民族間や人種同士の差別などなど、いろいろな場面で、雑多な暴力が正当化されています。

そして、正当化されているために、その暴力の発生源が私たち自身だということは、なかなか認識できないですし、認識しようとはしません。

また、私たち自身が暴力の発生源であることを認識することは、ある意味自分に対しても、他人に対しても、そして社会に対しても、敗北を認めることなので、あくまでも痛みや不条理の原因を外に見出そうとし、やがては、唯一まことの神の存在否定にまで及びます。

滅びる前のイスラエルでも、金銭のために正しい人や正しいことがねじ曲げられ、履き物一足のために貧しいものが売られ、子と父が同じ女のところに通う性的乱れがあり、神を礼拝する場では罰金で取り立てられたぶどう酒が飲み交わされる等の暴力が蔓延っていました（アモス2：6－8）。

でも、それらの暴力的行為は、力はあるけれども、物事を神の愛に準じて洞察することの出来ない者たちによって正当化され、さらには暴力と認識されないように、いかにも理屈に合っているように見せかけ、もっともらしくでっち上げられていました。

ひとまず気持ちいいことは良いことで、とりあえず利益を生み出すことも良いことであるとする、多様な正当化で塗りたくっている現代社会に生きる私たちにも、多分に通ずるところがあると思います。

## Part Two

### ローマ人への手紙3：20－24（パウロ）

聖書は私たちに、イエス・キリストの罪の贖いを信じて義とされる（神からの無罪宣告 *Dikaioo*）と教えてくれますが、イエス・キリストの罪の贖いを信じて義とされるということと、自分で自分を正当化することとは、全く次元の違う話ですし、比較にもなりません。

イエス・キリストの贖いを信じて義とされるということには、“自分が十字架に架けられるしかない罪人であることを告白すること”が必ず伴いますが、正当化には“言い張ること”しか伴いません。

イスラエルが滅びた理由は、“自分の正しさを言い張り続けたこと”です。そして、自分たちが陥っている滅びの原因を外ではなく、外に見出そうと、自

分たちの処遇を正当化することばかりに躍起になっていました。

そういった状況の中で、今ダニエルは、自分の罪を認めるんです。

自分の罪ばかりか、自分の民イスラエルの罪まで、我が罪だと告白しながら、主の前に伏して祈りを献げます。

“言い張るために”握りしめている拳を開こうとしない神の民イスラエルを、ダニエルは両手を広げ、そんなイスラエルを抱き、一緒に進むのだと、神の前に涙ながらに伏して、願いを献げます。

私たちの暮らしは、小さな、もしくは大きな滅びを日夜重ねながら、刻んでいく歩みだとも言えるかもしれませんが、その小さな、または大きな滅びの原因とその対処を、いつも目に見えるものばかりに求めます。

「こんな状態になってしまったのは、あの方法でなくこの方法を選び取ってしまったからなのではないだろうか、こんなことになってしまったのは、あの人やこの人のせいなんじゃないか、この満足の出来ない生活になってしまったのは、あの道ではなくこの道に進んでしまったからではないだろうか、こんな空しさが心を支配しているのは、あれも無いしこれも無いからなのではないだろうか、ならば、あの人に相談し、この本を読み、その方法で何とかしよう。」と、外的要因と、見てくれの対処ばかりを探し求めます。

日常の生活で経験する多種多様な“滅び”の要因を、上っ面やうわべのものばかりに求めてしまいます。

なぜなら、痛いからです。

滅びに伴う痛みを少しでも早く取り除きたいから、早い解決に見えるうわべのものばかりを求めてしまいます。

しかし、ダニエルは、“滅び”に伴う“痛み”の解決だけを主なる神様に求めるのではなく、“滅び”という痛みの奥深くに鎮座している“罪”と正直に向き合って、罪を認め、罪を告白し、同じ罪人である仲間の痛みにもまでも共感します。

### 第一コリント 6 : 7 - 9a (パウロ)

ダニエルは、互いに言い張りながら、訴え合いながら、自らを正当化すればするほど、それが敗北であることを知っていました。

すべての正当化の中心には、巧妙な嘘が練りこまれていることを知っていたのでしよう。

正当化するくらいなら、兄弟による自分に対する不正やだましさえも甘んじて受け、その兄弟の罪までも、我が罪として神に告白し、悔い改めました。

人の作り上げた繁栄の象徴である帝国生活のはかなさとは比較にならない、栄光の神の国の相続人とされたことの価値を、全人生に渡って教えられ、体験させられ続けてきた結果、このような祈りを献げることが出来たのでしょうか。

神の前にあって罪深さを認め、告白する、霊的に正直なダニエルに、主なる神様は、直ちに、すばやい祈りの応答をくださいました。

さらには、そんなダニエルに対して、9：23で神様は、「そんなあなたを**特別に愛している。**」とまで、おっしゃるんです。

ダニエルのこの悔い改めの祈りは、主の御旨に合うどころか、主が70年間イスラエルの民たちに期待し、待ち焦がれていた信仰告白だったということです。

### Part Three

イエス様が、この地上での宣教のわざを始めなされた時、一番最初に口にした言葉は、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたからです。」という言葉です。

つまり、イエス様の宣教の目的、十字架に架かれた理由は、人々を悔い改めさせることでした。

悔い改めと訳されている言葉は、本来、方向転換を意味しますが、どう方向転換するのか？

それは、すべての原因と対処を外に求め、責任を人に追求しようとする生き方から、

まことの神の前に我が身を向け、そこで示される我が内にある罪を正直に認めるという方向転換です。

でもこれは、一朝一夕にはなりません。

もちろん最初に、主イエス様が出会って下さり、イエス様を救い主として受け入れクリスチャンとなった時には、自分が罪人だということに気付かされますが、それは始まりでしかなく、罪の底なしの姿を悟ることは出来ません。

罪の底なし加減は、一瞬にして気付けるものではありません。

主イエスの前にあって罪人であることを知り、歩む中で、底なしの罪の姿を、少しずつ、少しずつ悟らされていきます。

かと言って、そこに絶望はありません。

先週もお話ししましたように、キリスト・イエスにある者は、決して罪に定められることが無いからです。

そこにあるのは悔い改めと、悔い改めに伴う、底なしの神の赦しの愛です。

私たちキリスト者は、罪の底なし加減を知るとともに、それを遥かに凌駕する神の赦しの愛の底なし度合を悟っていくようになっています。

これが聖化ですね。

ダニエルだって、始めからこんな祈りを献げることが出来たわけではありません。

この時のダニエルの年齢は80代半ばですが、こんな祈りを献げられるようになるまでには時間を要し、人生を要し、罪の底なし加減を嫌って程に知り、それ以上に神の赦しの愛の底なし度合を体験していき、ついに、聖書の御言葉に触れられ、神様に特別に愛していると言われるほどの、即座の応答をいただけるような祈りを献げることが出来るように、神の子らしくされていったわけです。

#### Part Four

祈りは、人が言葉を話し、扱うようになるのと似ていると言われたりもしますが、始めから言葉を流暢に話せる人なんかいません。

誰もが皆、ママ、パパから始め、やがては長い文章を書くまでになります。

ダニエルのように祈りを献げられるようになるまでには、人生に神様の足跡が刻まれ、信仰の年輪が重ねられて行って、初めて出てくる祈りなのかもしれません。

もちろん、年の功がなんちゃらと言って、若いクリスチャンにはこんな祈りは出来ないなんてことを、言おうとしているではありません。

大事なのは、ダニエルは、神の子とされた身分を忘れることなく、神の子という身分に相応しい霊的水準に達することを人生の目標にして、生きたということです。

貧しくても、神の子らしくなっていれば良し。

逆に、どんなに富んでいても、神の子らしくなっていないならば、悲しむべきことだという生き方です。

ダニエルは、幼い頃から神を真摯に慕い求め、神の言葉に従って、命を張るまで日に三度祈ることを守り続けて、その人生に、主なる神様の足跡が刻まれていきました。

そこには、悔しさもあり、痛みもあり、未解決もあり、やりきれなさも、当然ありました。

でも、やがて、とんでもなく速い応答と、あなたを特別に愛していると言われるほどの神の御旨に適う祈りを献げる、祈り手とされていきました。

そして、その祈りの内容こそ、悔い改めです。

底なしの罪を正直に告白し、赦しを乞い、仲間を抱き、原因と責任を外に見出すのではなく、自分自身の罪と神の愛の深さに見出し、回復と癒しを神に期待した、愛なる悔い改めの祈りです。

そして、この悔い改めの祈りを神は愛されました。

悔い改めの祈りは、愛です。

悔い改めの祈りは、クリスチャンになる時、一度して、はい終わりというものではないですね。

キリスト者が日々、重ねていく祈りが、悔い改めの祈りです。

そして、悔い改めの祈りを献げるならば、必ず、神の愛を体験します。

断食をし、粗布をまとい、灰をかぶり、哀願しながら献げる悔い改めの祈りの先にあるのは、神の愛です。

## Conclusion

説教の冒頭に、イスラエルの民たちが滅びた理由は、自らの身分を忘れたためだと言いましたが、イスラエルの民たちが忘れたのは、自分たちが神の民であり、神の子であるということです。

神の民、神の子という身分を忘れることは、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたからです。」というイエス様の言葉に価値を見い出せなくなることです。

つまり、悔い改めの祈りを献げないことこそ、神の民だということを忘れることでもあります。

ダニエルのみならず、モーセも、アロンも、ヨシュアも、ダビデも、エリヤも、



ヨブも、ペテロも、パウロも、神の民であるという身分を忘れずに、愛なる悔い改めの祈りを重ねました。

そして、ダニエルのように、「あなたを特別に愛している。」という応答をいただきました。

「あなたは神様から特別に愛されている。」こんな祈りの応答って、ありますか？

病が治った、食べ物が与えられた、お金を与えられたなどの物事の解決を遥かに超える応答です。

病が治らなくても、食べ物が与えられなくても、お金が与えられなくても、「そんなあなたを神様は**特別に**愛しておられる」という神の告白は、何にも勝る力になります。

人が不安になるのは、愛されているという確信がぐらつくからです。  
病や食料や財産のせいで不安になるのではなく、究極的には、愛されているという確信がぐらつくからです。

ならば、底なしの神の愛を体験する、愛の悔い改めの祈りをさせていただくではありませんか。

お祈りいたします。

祝祷：マタイ 4：17